

長崎県感染症発生動向調査速報

平成25年第30週 平成25年7月22日(月)～平成25年7月28日(日)

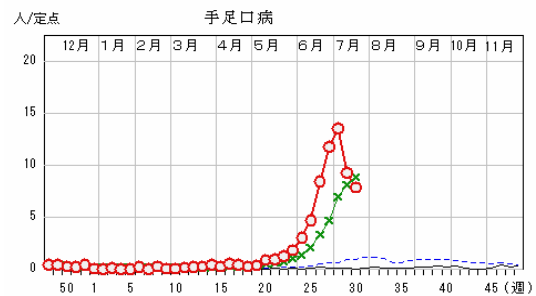
定点報告疾患(定点当たり報告数の上位3疾患)の発生状況

(1) 手足口病

第30週の報告数は346人で、前週より63人少なく、定点当たりの報告数は7.86であった。

年齢別では、1歳(147人)、2歳(69人)、～11ヶ月(42人)の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、対馬保健所(23.00)、県南保健所(17.80)、県北保健所(13.00)が多かった。

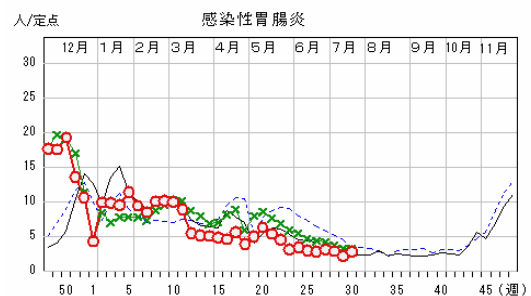


(2) 感染性胃腸炎

第30週の報告数は125人で、前週より29人増加し、定点当たりの報告数は2.84であった。

年齢別では、1歳(21人)、～11ヶ月(17人)、2歳(13人)の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、上五島保健所(8.50)、佐世保市保健所(4.17)、県央保健所(3.83)が多かった。

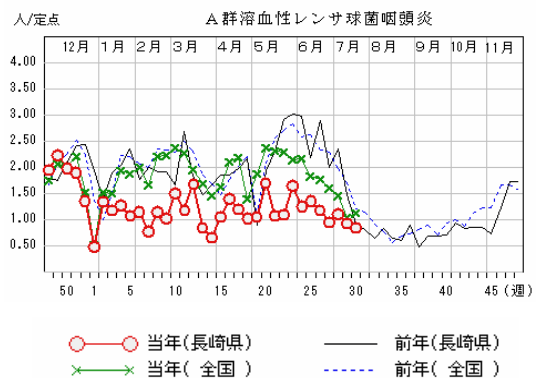


(3) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第30週の報告数は37人で、前週より4人少なく、定点当たりの報告数は.84であった。

年齢別では、5歳(7人)、6歳(7人)、4歳(5人)の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、県北保健所(2.67)、県央保健所(1.67)、長崎市保健所(1.10)が多かった。



トピックス・季節情報

【手足口病】

長崎県における第30週の患者報告数は、前週より63人減少して346人でしたが、定点当たりの人数は7.86と、依然警報レベル(5)の状態です。上五島地区以外の地域で報告されており、対馬地区23.00、県南地区17.80、県北地区13.00、長崎地区8.50、佐世保地区6.50、西彼地区5.25)と先週よりも減少しているものの、警報レベル「5」以上を示しています。対馬をはじめとする離島地区では、今後の流行拡大に注意が必要です。

手足口病は、初夏から夏にかけて流行し、口腔粘膜および四肢末端に現れる水疱性発疹を特徴とする乳幼児に多いウイルス性疾患です。感染経路は、糞口感染が主体で、飛沫感染や水疱内容液からも感染します。急性期に最もウイルスの排泄量が多く、発症してから回復後も2～4週間程度は、便中にウイルスが排泄されるため感染源となりえますので、保護者は乳幼児に手洗い、うがいを励行させて、感染防止に努め体調管理に気をつけてあげましょう。原因ウイルスの種類によっては手足口病とともに無菌性髄膜炎や脳炎を併発させることもありますので、保護者は早目に医療機関を受診させてあげるよう心掛けましょう。当センターの調べにより本土地区全域より採取された検体から、原因ウイルスとして一昨年流行したコクサッキーウイルスA6型が検出されています。

【感染性胃腸炎】

第30週の感染性胃腸炎の報告数は125人で前週より29人増加しました。定点当たりの人数も2.84と全体的に小児状態で推移しています。

感染性胃腸炎は、細菌又はウイルスなどの病原微生物による嘔吐、下痢を主症状とする感染症です。年齢別に見ると、報告の多くは1～2歳の乳幼児が占めています。原因はロタウイルス、ノロウイルスをはじめとするカリシウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルス感染による場合が主流ですが、腸管出血性大腸菌などの細菌が原因となる場合もあります。

原因微生物のうち、ロタウイルスについてはすでにワクチンが認可されていますので、予防することが出来るウイルスです。特に、小さいお子さんがいらっしゃるご家庭では、保護者の方が手洗いの励行、体調管理や体調の変化に心掛けてあげるなどして感染防止に努め、早目に医療機関を受診させてあげるよう心がけましょう。

【A群溶血レンサ球菌咽頭炎】

長崎県における第30週の報告数は37人で、前週より4人減少し、定点当たりの人数は0.84でした。県北地区（2.67）は他の地域に比べ報告数が多いので、今後の動向に注視していく必要があります。

本感染症の好発年齢は5～15歳で、鼻汁・唾液中のA群溶血性レンサ球菌の飛沫などによってヒトからヒトへ感染します。また、食品を介しての経口感染もあります。潜伏期間は約1～4日で、突然の発熱（高熱）、咽頭痛、全身倦怠感、時に皮疹もあります。急性期患者の感染力は強いですが、適切な抗菌薬の投与により多くは1～2日後には症状も消失し、感染力も著しく低下します。不十分な治療は無症状保菌者を生じやすいため、早期に医療機関を受診するとともに、手洗いやうがいを励行し、感染防止に努めましょう。

トピックス：手足口病が流行しています。

季節情報でもお知らせしているとおり、昨年はほとんど報告のなかった手足口病が長崎県内、特に本土地区で定点あたりの報告数が依然警報レベル「5」の2～3倍程の高値を示しています。離島地区では第29週から報告数が急増した対馬地区で、第30週も報告数が増加しているため注意が必要です。県内の44小児科定点からの累積報告数は2,958名にのぼります。流行はこれまで発生しなかった東日本にも拡大し、全国的な流行になっています。

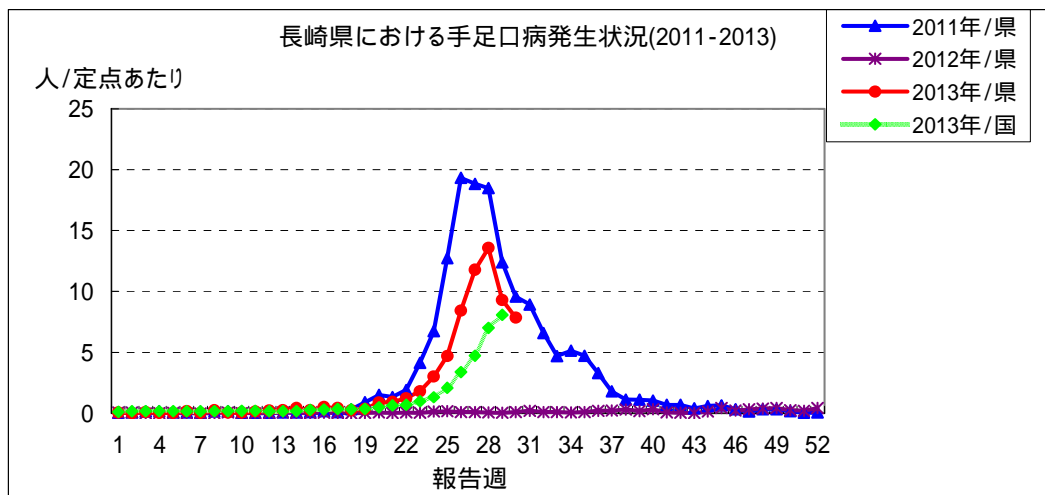
手足口病は、その名のとおり四肢および口腔内に水泡性の発疹を生じる疾患で、通常はCA16、CA10、EV71などのウイルスにより引き起こされます。ところが、2011年に全国的に手足口病が大流行した際の原因ウイルスは、これまでは類似疾患であるヘルパンギーナの原因ウイルスとして知られていたCA6が主流でした。本年の流行の原因ウイルスは、関西、中国、四国地方ではCA6、CA16およびEV71が混在していましたが、最近では全国的にCA6が主流になっているようです。本県をはじめ流行が認められている九州各県では当初よりCA6のみが流行の原因ウイルスとして同定されています。今回の流行の規模は、大流行した一昨年（2011年）と比較するとやや小さいようです。これは、原因ウイルスの主流が一昨年大流行した時と同じCA6であるため、一昨年の流行期以降に出生したCA6に対する抗体を保有しない12歳以下の幼児が今回の流行の好発年齢となっていることが要因の一つであると考えられます。

CA6による手足口病の臨床的特徴は、上腕、臀部、大腿部の発疹が手掌、足底より目立つ場合が多く、従来の典型的な手足口病では認められない口囲や頸部周辺にも皮疹が認められます。また、水痘との鑑別を要する例があるほど水泡が大きいことや治癒した1～2ヶ月後に爪甲脱落症が認められる症例が多いのも特徴の一つです。

基本的には予後良好な疾患ですが、原因ウイルスによっては、稀に髄膜炎、小脳失調症、脳炎などの中枢神経系合併症などのほか、心筋炎、急性弛緩性麻痺などの多彩な臨床症状を併発することがあります。抗ウイルス剤やワクチンは開発されていません。咽頭で増殖したウイルスによる飛沫感染と、腸管で増殖したウイルスによる糞口感染を起こしますので、外出先から戻った際の手洗い・うがいに加えて、子どものオムツを取り替えたあとなどは手洗いを忘れないよう予防を心がけることが重要です。

手足口病の好発年齢は幼児期から学童期にかけてですが、大人でも感染する可能性があります。原因となるウイルスの種類が多いため、以前感染したウイルスに対する免疫はできますが、他の原因ウイルスに感染した場合には、手足口病に再度罹患することになります。

懸念されていた離島地区での流行が、第29週の対馬地区で認められました。今後の発生動向に注意が必要です。

**トピックス：長崎県内で4例目の重症熱性血小板減少症候群（SFTS）の発生が確認されました。**

今年、1月30日に、国内発生例としては初めてダニ媒介性のウイルス感染症「重症熱性血小板減少症候群（Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome : SFTS）」の山口県における患者発生および死亡例が報告されました。その後、各地から確認症例の報告が相次ぎ、長崎県でも平成17年(2005年)の症例2件に続き本年第22週に平成25年の発症例が初めて確認され、第29週に新たに平成25年の発症例が報告されました。

国内での患者報告を受けて、SFTSの発生を予防し、そのまん延の防止を図るため、平成25年2月22日付の法改正に基づき、平成25年3月4日から感染症法上の4類感染症に指定されました。調査・研究の進展とともに、

原因となるSFTSウイルスは海外から持ち込まれたものではなく、以前から国内に存在していたことが明らかになりつつあります。

< 感染予防について >

感染源とされているマダニは全国に分布しており、主に森林や草地のほか市街地周辺でも見られ、春から秋にかけて接触する機会が増えることから、感染予防が最も大切です。今のところ、有効な抗ウイルス剤やワクチンはありません。

行楽やハイキング、農作業など、ダニとの接触が多くなる季節となりますので、野外で活動する際は、長袖、長ズボン、長靴を着用するなどして肌の露出を極力避けて感染防止に心がけましょう。

もし、ダニに咬まれていたことに気づいた場合は、自分で無理に取ろうとせず、医療機関で取り除いてもらいましょう。

マダニに咬まれた後に発熱等の症状があった場合は、速やかに医療機関を受診しましょう。受診した医療機関では、咬まれた状況などをできるだけ詳細に説明しましょう。

多くの場合、SFTSウイルスを保有しているマダニに咬まれることにより感染するといわれていますので、インフルエンザのように人から人へ感染して広がるものでないとしています。

< 重症熱性血小板減少症候群(SFTS)について >

(参考)厚生労働省ホームページ(重症熱性血小板減少症候群について)

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou19/sfts.html>

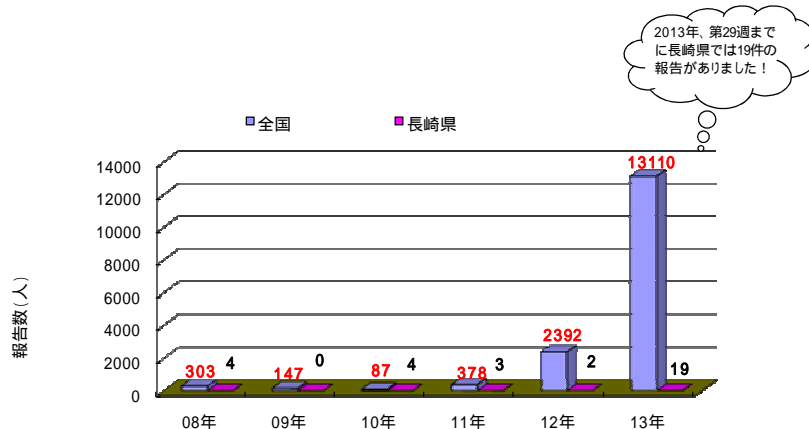
トピックス：昨年に引き続き風しんが増加しています。

今年は、昨年以上に風しんの患者数が増加し、これに伴う「先天性風しん症候群」の報告数も第23週に東京都で新たに1例の報告が加わり、今年に入り計6例(暫定値)の報告がなされています。昨年の風しんの全国の累積値に比べて、本年の第29週までの累積値は、13,110人と昨年の5.5倍以上にもものぼるため、注意が必要です。

風しんはせきやくしゃみなどの飛沫から感染し、通常は発疹や発熱が起こりますが軽微な症状で経過し重篤化することはほとんどありません。しかしながら妊娠初期に感染すると、胎盤を経て胎児にも感染し、先天性の心疾患や難聴、白内障など(先天性風しん症候群：CRS)を引き起こす危険性がある恐ろしい感染症でもあります。

風しんやCRSは予防接種により予防可能ですが、妊婦へのワクチン接種は禁忌であるため、妊婦または妊娠する可能性の高い方に伝播させることのないよう、周囲の身近な人は医師と十分相談の上、抗体検査やワクチン接種を受けることが重要です。

本県では今年に入ってから第29週までに、19件の報告がありました。今後の風しんの動向に注視して十分に注意しましょう。



報告年(2008～2013年第29週まで)
全国と長崎県の風疹の報告数の推移

トピックス：日本脳炎に注意しましょう。(注意報発令中)

長崎県では日本脳炎の流行予測を目的として、毎年7月～9月の間に日本脳炎ウイルスの主な増幅動物であるブタ(県産肥育ブタ)のウイルスへの感染状況を各回10頭ずつ8回(計80頭)、調査しています。今回、7月23日(3回目)に調査した10頭のうち、2頭のブタから日本脳炎ウイルス遺伝子、また別の2頭から日本脳炎ウイルスに対するIgM抗体が検出されました。日本脳炎はウイルスに感染したブタを吸血した蚊によって媒介され、ヒトに感染することから、日本脳炎が発生しやすい状況にあると考えられます。本県では平成22年(諫早市)、平成23年(諫早市・五島市)と2年続けて患者が発生しています。今年は例年より2週間も梅雨明けが早く、最近までほとんど降雨がなかったことから、ブタへの感染率の立ち上がりは例年より遅れているようです。これから本格的な流行シーズンとなりますので十分注意が必要です。

日本脳炎は日本脳炎ウイルス(Japanese encephalitis virus:JEV)によって起こるウイルス感染症です。人にはこのウイルスをもっている蚊、主にコガタアカイエカに刺されることによって感染します。患者発生は西日本に多く、蚊の発生時期である夏から秋にかけて報告されています。なお、人から人に感染することはありません。

せん。また、感染者を刺した蚊に刺されても感染することはありません。潜伏期間は5～15日で、数日間の高熱、頭痛、嘔吐、めまいを発症し、重症例では、意識障害、けいれん、昏睡などがみられ、マヒ等の重篤な後遺症が残る可能性もあります。しかし、感染しても日本脳炎を発症するのは100～1000人に1人程度で、大多数は無症状で終わります。ただし、幼児および高齢者では発症率が高く、発病すると

死亡率は20～40%で、幼児や高齢者では死亡や後遺症の危険性が高くなります。

予防にはワクチン接種が有効です。特異的な治療はなく、一般療法・対症療法が中心で、肺炎などの合併症の予防を行います。また虫除けスプレーや長袖などを着用し、媒介する蚊（主にコガタアカイエカ）に刺されないような工夫が大切です。

ワクチン接種の詳細については厚生労働省のホームページを参考にしてください。

【厚生労働省ホームページ】

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou20/annai.html>



コガタアカイエカ
国立感染症研究所HPより

